

【シンポジウム】

間文化主義再考

L'interculturalisme aujourd'hui : quelques réflexions sur sa naissance,
son développement et ses polémiques

趣旨と総括
Introduction

コーディネーター：小倉和子
OGURA Kazuko

ケベックの^{アンテルキェルチュラリスム}間文化主義は、現代ケベック社会のあり方を特徴づける思想として、当学会の大会や研究会でもこれまでしばしば取り上げられてきた。1970年代以降、カナダ連邦政府が政策として打ち出している「多文化主義 multiculturalism」が、じつは民族間の分断をもたらす危険があるとの指摘をたびたび受ける一方で、ケベックの間文化主義はこの多文化主義の欠点を修正するものとして、ケベック内外から注目されている。

AJEQのメンバーが中心となって現在翻訳が進んでいるジェラルド・ブシャールの *L'Interculturalisme* では、ケベックにおける間文化主義は、フランス語をコミュニケーションのための共通言語として、フランコフォンのホスト社会とさまざまな出自をもつニューカマーたちが互いの交流を推進しつつ、多元的な社会を実現していくものである、と提案されている¹。

しかし、多文化共生の1つの方法として世界中でこれほど関心をもたれている間文化主義は、シンポジウムに先立って行われたマリー・マカンドルー教授（モンレアル大学）の基調講演にもあったように、都市部においては教育現場や日常生活面での実践が急速に進んできているものの、州政府による明確な定義はいまだに打ち出されていない。ブシャールの提言にもかかわらず、州政府は、古くから住み着いている多数派のフランス系ケベコワと少数派の英系ケベコワ、そしてアロフォンの新移民たちが混在する中で、どのような立ち位置をとるべきか模索しているようにさえ見える²。

そのような現状のせい、間文化主義がケベックでいつ、どの分野で、どのように議論され始め、実践され、現在に至っているのかは、思いのほか辿

りにくく、ケベコワに聞いても、その人の専門分野によって返事が異なるし、研究書を繙いても、「よくわかっていない」という書かれ方をしたものが多い。それが、今回、日本の片隅で「間文化主義再考」といういささか大それたシンポジウムを企画した理由である。

大雑把な見方をすれば、ケベックでは、1960年代の「静かな革命」を経てフランス系が独自の道を歩み始めたときから、英系と棲み分けて閉鎖的ではあっても「純粋に生き延びる」ことを止め、外からやってきた多様な出自の人々を受け入れながら成長していく必要に迫られるようになった。これはケベックのフランス系の人たちが経験した最大のパラドックスかもしれない。彼らが自分たちのアイデンティティを主張して「我が家の主人」になった途端、それまで英系に同化することの多かった移民たちを自分たちが引き受けることになったのである。元をただせば彼ら自身もヨーロッパからの移民であり、ケベック社会は移民の受け入れを前提にして成長してきたので、「移民を受け入れない」という選択肢はない。生粋のケベコワがネオ・ケベコワたちとともに暮らしやすい社会を築いていくにはどうしたらよいか、という課題に直面することになる。

日本でも近年、少子高齢化が急速に進み、移民や難民の受け入れが話題になることも増えてきたが、残念ながら、あまり議論が進展しているようには見えない。大多数の日本人は、異文化との共存の経験が少ないので、なんとなく不安、「さわらぬ神に祟りなし」といった気持ちなのではないだろうか。たとえばこの「*interculturel*」という語の訳語ひとつとってみても、「異文化～」、「異文化間～」、「間文化～」などが併存し、「多文化～」と混同されることもしばしばである。

そのような中で、社会統合に関わるきわめて政治的なこの間文化主義の淵源がいったいどこにあるのかを、文学、芸術、教育、社会学などの分野における過去の先駆的な動きに注目し、また、ケベック以外での似たような思想（多文化共生を必要としているのは何もケベックだけではないので）にも注目しながらあらためて整理し、知識人が唱えている、ある意味で「理想郷」的な思想が巷にどの程度浸透しているのか、都市部と地方とではどのくらい開きがあるのか、古くからケベックに住み着いている人々と新移民たちとのあいだの意識の差はいかほどなのかといったことを確認してみよう、というのが今回の企画だった。

各分野からの報告者と役割分担は以下の通りである。

はじめに廣松勲会員（専門はフランス語圏文学、とくにカリブ海文学とケベックのハイチ系移民文学）。ある概念や主義が社会に広まり、定着するとき、文学や芸術が先駆的役割を果たす例は少なくない。間文化主義についても同様のことが言えるのではないかという推測のもと、1970年代後半から90年代にかけてモンREALで発行されていた文芸雑誌 *Dérives*（漂流）と *Vice Versa*（反対に）をとりあげ、「間文化的 *interculturel*」や「横断文化的 *transculturel*」という言葉の淵源を辿った。

次に曾田修司会員（専門は文化政策）。ケベックは、社会を統合し、みずからのアイデンティティを内外に主張するためにアーティストの育成にも力を入れている。間文化的傾向の中でさまざまな出自のアーティストたちを起用して80年代以降続々と登場したパフォーミングアーツ集団に注目し、モンREALが世界に向けてケベック文化を発信する拠点になっていった過程をベルギーの状況とも比較しながら論じた。

3人目はステイーヴ・コルベイユ会員（専門は17世紀フランス文学および日本文学）。本人の専門からはやや離れるが、モンREALで移民に外国語としてのフランス語（FLE）を教えたことのあるケベコワとしての経験から、ケベックにおけるフランス語教育と間文化教育の関わりについて考察した。

最後は飯笹佐代子会員（専門はオーストラリアやカナダなどにおける多文化共生の理念や政策）。最近の聞き取り調査の成果に基づいて、大都市から離れた地域における間文化主義の定着状況や人々の意識について、興味深い報告を行った。

また、4名の報告の後、真田桂子会員（専門はケベック文学）と伊達聖伸会員（専門は宗教学、とりわけフランスやケベックのライシテ）もディスカッサントとして加わり、会場を巻き込んで、定刻を過ぎても止む気配のない活発な議論が展開された。

ケベックの取り組みを紹介することで、現在世界で起こっている移民排斥の動きや日本社会の将来について考える小さなきっかけとなったのであれば幸いである。当初、「間文化」という語がまったく別の文脈で使われている地域（たとえばヨーロッパ）との比較にまで踏み込むことを目論んでいたが、残念ながら、時間の制約もあって十分に行うことができなかった。こちらについては次の機会に譲りたい。

（おぐら かずこ 立教大学教授）

注

- 1 Gérard Bouchard (2012) *L'Interculturalisme*, Boréal, p. 52-53 参照。
- 2 本シンポジウム（2015年10月開催）の後、2016年3月に以下の文書がケベック州移民・多様性・社会包摂省から発表され、間文化主義の重要性が強調された。
Ensemble, nous sommes le Québec, p. 35-36.
http://www.midi.gouv.qc.ca/publications/fr/dossiers/Politique_ImmigrationParticipationInclusion.pdf (2016年3月28日アクセス)

【シンポジウム】

間文化主義再考

L'interculturalisme aujourd'hui : quelques réflexions sur sa naissance,
son développement et ses polémiques

ケベック文学における間文化主義の誕生
Naissance de l'interculturalisme dans la littérature
québécoise

廣松 勲
HIROMATSU Isao

1960年代に始まった政治・社会・経済的変容に伴い、ケベック社会では「英系と仏系という対立関係を軸にした」言説に加えて、「より広く世界の諸文化との関係を軸にした」言説が広く見られるようになった。その拡がりの中で、いわゆる多文化主義論だけではなく、第3世界論やフェミニズム論に基づいて、アメリカ大陸全土を視野に入れた社会的争点が大きく扱われ始めた。このような経緯から、1970年代以降のケベック文学では、英仏の2項関係に限らず、様々な文化という複数の項の関係に言及した言説が多く生産された。特に1970年代から1980年代における移民の増加は、ケベック社会の人口統計に大きな変化をもたらすと同時に、ケベック文学という制度の在り方についても再考する必要性が生まれたといえる。

このような背景の中で、ケベック文学では、多文化・第3世界・フェミニズムといったテーマを扱った雑誌が少なからず刊行されることになった。本発表では、文学領域における間文化主義の誕生を論じるために、早くから「間文化的 *interculturel*」という言葉を用いてきたとされる雑誌 *Dérives* (1975年～1987年)、また本雑誌と比較されることの多い雑誌 *Vice Versa* (1983年～1996年)での文化思想について検討を行った。

まず初めに、第2次大戦以後のケベック社会における雑誌刊行数の統計に基づきながら (Michel Nadeau, « Introduction : une cartographie des revues culturelles au Québec », dans *Globe*, Vol. 14, No. 2, 2011, p. 13-20.)、1970年代と80年代には、突出して多くの雑誌が刊行されたことが確認された。その上で、

ケベック社会が急速に多民族・多文化化する 70 年代以降において、移民作家・知識人にとっての「雑誌」というメディアの社会的役割について論じた。当時、移民作家・知識人たちは、文学作品や雑誌の刊行、映画・音楽・舞台芸術での活躍を通じて、移民第 1 世代だけでなく、それ以後の世代をも社会的に顕在化させるため、無視できない役割を果たしていた。そのような彼らにとって、「ケベック文学」という誕生して間もない文学制度の中で、移民系の作家・知識人が共同で自らの言説を生産することを可能にするための 1 つの有力な場所が、「雑誌」というメディアであったといえる。つまり、彼らは雑誌を介して、移民の経験や移動に基づいた世界観を受け入れ社会のケベックに知らしめる役割を果たしていたのである。

以上のような社会的役割を担っていた雑誌の中でも、*Dérives* と *Vice Versa* は、ケベックの文学領域において文化思想を形作ったという意味で重要な雑誌である。まず、*Dérives* は刊行当初は「第 3 世界／ケベック、新しい文化状況」という副題を伴って出版されていたが、1979 年（19 号）より「間文化雑誌 *revue interculturelle*」と明示されるようになった。とはいえ、必ずしも大きく編集方針が変更されたという訳ではなく、第 1 号の巻頭言にも見られるように、本雑誌の特徴はそれまでのケベックの文学領域においては余り言及されてこなかった「中南米、アフリカ、アジア」といった地域とケベック社会との関係を見出そうとする観点にある。すなわち、図式的に言えば、ケベック社会論と第 3 世界論とを通底させるような言説を目指していたといえる。また、本雑誌はハイチ系の作家を中心にした創作物を発表する場所でもあった。しかしながら、「間文化主義」という概念そのものの明確な定義が提示されたわけではなく、あくまでこの雑誌を構成する文学的な創作、社会批評、政治的主張の中に垣間見られる立場であった。

Vice Versa の方とえば、*Dérives* とは異なり、第 1 号から「横断文化的雑誌 *revue transculturelle*」と銘打って刊行され、自らの雑誌が担う文化思想について意識的であったことが分かる。さらに、イタリア系の作家・知識人が中心であったとはいえ、フランス語・英語・イタリア語・スペイン語などで書かれた文章が入り混じり、また多くの図版および写真なども効果的に配置されることで、内容だけでなく視覚的にも、複数の文化との関係性を提示しようとしていたと考えられる。ただ、この雑誌には「間文化的」ではなく「横断文化的」という形容詞が用いられており、一見すると「間文化主義」とは異なった文化思想を主張していると考えられるかもしれない。しかし、第 1

号の巻頭言では「間文化的空間」という表現で「横断文化」を説明していると読み取りうる箇所がある点に鑑みると、当時はまだ「間文化主義」と「横断文化主義」の差異は明確化されていなかったということも予想される。加えて、本雑誌は単に複数の文化の関係性を考察するだけでなく、(例えば本雑誌サイトのトップページに見られる、同時に4言語で書かれた巻頭言などを読むと) 接触に伴って文化が変容する様に焦点化がなされたといえる。

本発表では、以上のような2つの雑誌における文化思想を概説することで、ケベック文学における「間文化主義」という発想の源流を垣間見ることが目指した。確かに、いずれの雑誌においても「間文化主義」という概念に明確で一義的な定義が与えられていたわけではないが、しかし少なくともケベック文学において諸文化間の関係性を論じる際の中心的な場であったことが明らかになった。

(ひろまつ いさお 法政大学専任講師)

間文化主義再考

L'interculturalisme aujourd'hui : quelques réflexions sur sa naissance,
son développement et ses polémiques

間文化主義とパフォーミング・アーツ
Interculturalisme et art du spectacle

曾田 修司
SOTA Shuji

筆者の発表では、「ケベックにおける文化とアイデンティティの関係」、あるいは、「ケベックにおける文化政策と間文化主義との関係」を考察した。

ケベックのパフォーミング・アーツ全体の特徴として、ダンスやサーカスなどのフィジカル・シアター、それに、マルチ・メディア・アートがさかんであることが挙げられる。

1980年代には、シルク・デュ・ソレイユ（1984～）、ラララ・ヒューマンステップス（1982～）、カンパニー・マリ・シュイナル（1984～）など、世界的なサーカスグループ、ダンスカンパニーが、ケベックから次々と輩出した。演劇界におけるロバール・ルパージュの活動もこの時期に始まっている。何故、この時期に、ケベックから、このようなパフォーミング・アーツの新しい潮流が堰を切ったように生まれ出たのだろうか。

「トランスアメリカ芸術祭」（旧アメリカ国際演劇祭）（FTA）のディレクターであったマリ・エレヌ・ファルコンは、インタビューに答えて、1960年代から始まる「静かな革命」、フランス語憲章（1977）の制定、レファレンダム（1980）の実施などを経て、ケベックでは、自分たちの社会の独自性に対する意識が非常に高まったと指摘している。ケベック・ナショナリズムによるアイデンティティの希求が、ケベックの芸術家たちに大きな影響を与えたという見解である。

このことは、ヨーロッパにおいて同時代に見られた同じような現象を想起させる。1980年代のベルギーからは、ローザス（アンヌ・テレサ・ケースマイケル）、ヴィム・ヴァンデュケイピュス、ヤン・ファール、ヤン・ロー

ワースなど、国際的評価の高いアーティストが次々に輩出しており、その衝撃は、パフォーマンス・アーツの世界において「フランダースの波」(Flemish Wave)という言葉で形容されていた。

このように、同じ1980年代に大西洋を挟んで似たような現象が起きていたのは、単なる偶然ではなさそうである。ベルギーとケベックは、ひとつの国家の中に違う言語圏があることなど、その社会文化状況には類似している点があることが指摘できる。

実際、ブリュッセルのクンステン・フェスティバル・デザールの芸術監督であるクリストフ・スラフマイルダーは、ベルギーのパフォーマンス・アーツの過激性の理由について、「(ベルギーは)1830年に発足したばかりの新しい国」であることとともに、「常に周囲の国から占領されてきた」ことを挙げ、「国家としての強いアイデンティティの欠如(略)が、逆にアバンギャルドなプロジェクトを後押ししたのではないか」と説明している。

一方、パフォーマンス・アーツの社会的創造環境の変化という点に着目すると、モンリオールでは80年代前後に多くの芸術関係のフェスティバルが創設されている。モンリオール・ジャズ・フェスティバル(1979年～)、モンリオール世界映画祭(1977年～)、アメリカ国際演劇祭(1985年～)、国際ヌーベルダンス・フェスティバル(FIND)(1984～2003)、ケベックシティのカルフルなどである。国立サーカス学校の創設も1981年、舞台芸術の国際見本市であるCINARS(国際舞台芸術見本市)も1984年に始まっている。

ケベック・アイデンティティの確立という課題は、ケベックの文化政策にも大きな影響を及ぼしており、文化政策に関する州政府の立場及び具体的な政策課題をまとめた「ケベックの文化政策 私たちの文化、私たちの未来」(1992)という政府文書が後に発表された。このことにも見られるように、ケベック州は、北米の中では例外的に、政府が文化振興に積極的に関わるヨーロッパ型の文化政策を志向してきたと言える。

モンリオールを本拠とするCINARSの創設者であるアラン・パレは、ケベック州政府が、初期のシルク・デュ・ソレイユに対して経済支援を行うとともに、当時、ケベックのアーティストのために国外市場を開拓する仕組みとしてCINARSの創設に協力したこと、その結果、ラララ・ヒューマンステップス、ルパージュなどの才能溢れるアーティストが世界の注目を集めたことを紹介している。彼らの舞台はたちまち評判を呼んで、CINARSの規模と影響力は急拡大した。もともと人口の少ないカナダ国内では観客が足りないた

め、才能あふれるカンパニーにとってマーケットは世界規模である必要があり、ケベックでの上演は、新作のラボラトリー（実験室）のようなものだとパレは述べている。

以上述べてきたことからの推察として、1980年代以降のケベックのパフォーミング・アーツの空前の活況は、ヨーロッパと共通する新しいフィジカル・シアターの潮流と、ケベックにおける文化アイデンティティ構築に向けての文化重視の政策の流れが合流したことの帰結としてもたらされたと言えるのではないか。

最後に、間文化主義と言語とパフォーミング・アーツの関係について、今後、考察が必要と思われる点を挙げておきたい。

シルク・デュ・ソレイユは、世界50か国を超える国・地域から集まった1,300名以上のパフォーマーを擁する世界最大のパフォーマンス・グループ（2013年時点）であり、文化多様性の発現という点で間文化主義を象徴する存在だと言っても良いが、成功の要因として、その舞台がノン・バーバルなフィジカル・シアターであることが大きく影響している。人間の運動能力の極限までの表現と、身体概念の拡張により、世界各地の文化・身体言語をある統一的世界観で表現していることこそが、彼らが世界に類を見ない大きな成功を成し遂げた要因であると思われる。

一方、ケベックにおいて間文化主義が語られるとき、その政策課題として、通常は共通理解の基盤としてのフランス語の振興が第一に挙げられる。「ケベックの文化政策」においても、重視すべき政策課題としてフランス語の振興が一番に挙げられていた。社会的統合あるいは社会的包摂の観点から、その重要性に疑問の余地はないが、現実には、言語教育等の環境を整えなければ十分な成果をあげることは困難だという側面もあると思われる。

このように考えると、ダンスやフィジカル・シアターには、言語の問題を言わば「スキップ」してしまっ、一気に間文化主義の世界をそこに現出させてしまう魔法のような側面があるとも言えそうに思えるが、果たして、そのように単純に割り切ってしまうののだろうか。間文化主義を考えるにあたって、今後の課題としたいところである。

（そた しゅうじ 跡見学園女子大学教授）

（注）本文中で紹介した舞台芸術関係者の言葉は、すべて国際交流基金のウェブサイト「Performing Arts Network Japan」のプレゼンター・インタビューの発言から

引用したものである (Marie- Hélène Falcon 2008. 9. 30 / Christophe Slagmuylder 2008. 2. 29 / Alain Paré 2010. 5. 28)。

間文化主義再考

L'interculturalisme aujourd'hui : quelques réflexions sur sa naissance,
son développement et ses polémiques

間文化主義の政策と教育の改革
Politiques interculturelles et réformes du système
d'éducation

スティーヴ・コルベイユ
Steve CORBEIL

本発表は、2015年10月19日のカナダの総選挙の数週間前に行われた。当時、国の政策方針が大きく変わることに期待（または不安）を抱く民が多く、その気持ちに応えることが1つの目標であり、出発点でもあった。特に多文化交流や移民の受け入れに関する議論¹に注目し、その議論に基づいてケベック州の移民向けフランス語教育を再考した。最終的に、カナダの主権者はスティーヴン・ハーパーの保守党よりジュスティン・トルドーの自由党の包含政策を選び、その後シリアの2万5千の難民を受け入れることになった。人道主義的な行為として、世界中で高く評価されたものの、ケベック州を含めた国内では批判する声が増加し、様々な文化を共存させる策について考える必要性がさらに明確になった。本発表も、ジェラルド・ブシャールによる間文化性（interculturalité）に基づいて、ケベック州における異文化共存の問題とそれと最も直接的にかかわる教育制度について考察するものである。

多くのケベック州民はフランス語圏にルーツがあり、州の中ではマジョリティーであるが北米ではマイノリティであるので、ブシャールはフランス語を保護する異文化間交流政策に立脚し、カナダの多文化主義（multiculturalisme）とフランスの共和国モデル（modèle républicain）の中間モデルを提案した。それが、「間文化主義モデル」（interculturalisme）である。そこでは、マイノリティの文化と権利を尊重しながらも、フランス語圏の文化の継続を特別なものとして扱う。

具体的には、教育現場における間文化主義教育方針はフランス語教育の論

点に絞った。ブシャールの間文化主義はフランス語話者ではない移民のためにフランス語やケベック州文化を学ぶ機会を与えると強調した²。しかし、それはあくまでも社会がニューカマーのために学ぶ環境を作るのであって、学ぶ義務があるわけではない。つまり、フランス語学習は市民権を取得する条件にするべきではないとした。現時点では、様々な形で（集中講義、夜間講座、職場で行われる講座など）無料でフランス語を学習出来るが、講座の効率性に関する大きな疑問が残っている³。多くの場合は学習時間が足りず、全ての講座を受講しても十分に社会貢献出来ない恐れがある。また、講座の内容に関する疑問もあり、本発表では以下の通り指摘した。

1. ブシャールをはじめ、多くの間文化主義の学者はケベック文化の説明が出来ない。確かに、ケベック州の歴史は短い。また、様々な文化の交流に基づいて成立したものである。文化の定義が定着してしまうと、進化するしない、つまり新しい文化を受け入れない恐れがある。それは、間文化主義にとっては致命傷である。しかし、文化のコンセンサスがないと移民は当然、自分たちがどのように合わせるべきか理解出来ない。そのために、はっきりした元の文化がない限り、多文化交流はただの幻想に陥る。

2. 前者の疑問点と関係するが、ケベック文化の定義がない限り、その文化の代表であるフランス語をどのように教えるべきか考えることができない。言語は文化にアクセスし、社会に貢献するツールであるので、明確にその関係性を理解しないフランス語学習は動機付けづらいはずである。現場での経験に基づいた例を取り上げて述べたが、ケベックのフランス語に対するステレオタイプがまだ残り、ケベックでフランス語を勉強することを拒否する学習者が存在する。文化と言語が相対関係を持ち、文化の明確な定義がなされることによってフランス語教育の環境はさらに良くなると思われる。

3. グローバル化の背景のもとフランス語の魅力伝えることは難しい。また、海外で活躍する多くのケベック州のアーティストがアメリカの大衆文化のモデルに迎合し、さらにケベック文化の定義を考えづらくしている。

最終的に、ケベック州の文化の定義を定着させる問題が浮き彫りになる可能性が高い。他の文化を受容しにくく、不適切なナショナリズムが深まり、間文化主義の目標を達成できなくなる恐れがある。近年、政治家の不適切な政策とわずかの州民からの差別発言により、文化を定着させる危険性があることも事実である。しかし、フランス語はケベック州の文化の唯一の代表という状態を維持する限り、言葉とその文化は乖離したままである。まだ歴史

が短いケベック州の文化が萎縮し始めるとグローバル化の中に埋没し、最終的には消滅する恐れがある。従って、フランス語を教える際は、魅力的な文化を併せて紹介することでさらに効率的な授業になり、フランス語取得率が高くなる可能性がある。そのために、全てのケベック人が一緒に考えるべきであろう。

(スティーヴ・コルバイユ 聖心女子大学准教授)

注

- 1 *Zunera Ishaq prête le serment de citoyenneté avec son niqab*,
<http://ici.radio-canada.ca/sujet/elections-canada-2015/2015/10/09/006-zunera-ishaq-citoyennete.shtml> (2016/03/20 アクセス)
- 2 Gérard Bouchard, *L'interculturalisme : Un point de vue québécois*, Montréal, Boréal, p.45-92.
- 3 *La francisation de l'immigration : Le Québec rate la cible depuis 25 ans*
http://www.quebecfrancais.org/files/memoire_du_mqf_-_la_francisation_de_limmigration_-_le_quebec_rate_la_cible_depuis_25_ans__3.pdf (2016/03/20 アクセス)

【シンポジウム】

間文化主義再考

L'interculturalisme aujourd'hui : quelques réflexions sur sa naissance,
son développement et ses polémiques

日常におけるインターカルチュラリズム
L'interculturalisme dans la vie quotidienne

飯笹 佐代子
IIZASA Sayoko

interculturalisme について、これまでモンレアル大都市圏にのみ注目しながら、文献ないしは専門家・有識者の見解を通じて理解することに努めてきた。そのため、日常のレベルで人びとがそれをどのように捉えているのか、特に移民の少ない地域がどのような状況であるのか実感できなかった。

こうした問題意識から、2014年と2015年に、人口規模も多文化状況もそれぞれに異なる、プロサール、シェルブルック、サン・コームの3つの市/町を訪れ、首長や活動家、住民を対象に、*intercultural* な取り組みや経験、さらには移民や多様性に対する認識について聞き取り調査を行った。以下はその報告の一部である。

1. プロサール (Brossard)

同市はモンレアルに近接した、「ケベックで最も多文化的な市」(同市ウェブサイトで)であり、モンレアル大都市共同体 (CMM) に含まれる。1950年代に3千人ほどであった人口は、現在では8万人を超え、うち移民は37%を占める。ケベック州全体の13.6%、モンレアル大都市圏の22.6%に比べるとかなり高い(なお、カナダ全体では20.6%、トロント大都市圏では46%)¹。

市長のポール・ルデュック (Paul Leduc) 氏によると、香港の中国返還を機に、90年代以降アジアからのビジネス移民が増え、今ではアジア系が市民の2割を超えるという。これまで移民をめぐるトラブルはほとんどなく、「多文化都市のモデル」であると自負する。その要因として、90年代に同市が *interculturalisme* を宣言し、多文化間交流を推進する種々の活動を通じて、多

様性をもたらす豊かさへの理解を促してきたこと、そして住民に知識人が多くゲッターがないことを挙げた。

他方で別の一面もあるようだ。市内には立派なモスクがあり、スカーフを被ったムスリム女性を見かけることも多い（宗教別の人口は不明だが、たとえばアラブ系住民は市の全人口の約5%）。自宅で託児所を経営する女性も、10年以上前にケベックに移住して以来、スカーフを被り続けている。彼女は、パレスチナ難民として受け入れてくれたことに感謝しつつも、ケベック社会のムスリムに対する偏見を感じてきたという。秘書の勉強をしたが、おそらくスカーフのためにどの企業も不採用となり、自営の託児所を開くことにしたという。特に、2013年9月に州政府がケベック価値憲章（*Charte des valeurs québécoises*）を提案した後にムスリムに対する嫌がらせが増え、その法案が廃案となるまで外出もままならなかったと語った²。

2. シェルブルック（Sherbrook）

モンREALの東方、約150kmに位置する同市の人口は約20万人、うち移民は6%である。移民が増加しているプロサール市とは対照的に、定着率が低いという課題を抱えている。

この地で *Actions interculturelles de développement et d'éducation (AIDE) Inc* を主宰するモハメド・スラミ（Mohamed Soulamy）氏は、シェルブルック市を含むエストリ地区（ケベック州の地方行政区の1つ）における2006～2011年の移民定着率が、21.6%という低さであることを懸念する（ケベック州全体では51.7%）。移民の多くは仕事を求めて他州に流出する。しかし、この地域に雇用がないわけではなく、企業側が移民に門戸を開いていないことが問題だという³。その解決に向けて、氏は企業側に働きかけて求職中の移民とのマッチングを図るなど、雇用促進に向けた活動に力を入れている。

AIDEは1990年に、当時モロッコからシェルブルック大学に留学中のスラミ氏が、多文化間交流の推進を目的に創設した組織を前身とする。連邦や州政府などから助成を得ながら、多彩な事業を展開してきた。*interculturalisme* に関して州政府への提言も行う。

多様な文化的背景を持つ10名以上の専任スタッフと多くのボランティアがAIDEの活動を支える。ニジュール出身の女性スタッフは、*interculturalisme* の目的は「移民とホスト社会の人びとが共存共栄すること」であると述べた。シェルブルック大学の修士課程で *interculturalisme* を研究したという女性ス

スタッフもいた。彼女はこれまでの経験から、「*interculturalisme* はホスト社会の人びとが自信を持たなければうまくいかない。ケベックでは移民の方が活気があり、元からいるケベック人は自信を失っているように感じる」と語った。

3. サン・コーム (Saint-Côme)

この町はモンレアルの北 100 キロに位置し、人口は 2 千人超、移民はほとんどいない。町庁舎と教会と墓地を中心にのどかな田園風景が広がる。庁舎入り口の頭上の外壁には、石の十字架が埋め込まれている。

町長のマルタン・ポルドゥロー (Martin Bordeleau) 氏は、「ここはモンレアルとは全くの別世界であり、*interculturalisme* やライシテをめぐる議論も存在しない」と述べた。今でも町議会はカトリックの祈禱から始まる。「ライシテを突き詰めると、ケベックの伝統を失う恐れがある。カトリックの影響は大きく、それなしには今のケベックはありえない」と語る。その一方で、エルヴィルのようなやり方は滑稽だと批判し、「人口を補填するために町として移民を受け入れる予定はないが、シリア難民に限っては、住民たちはいつでも寛容に受け入れるだろう」とも述べた。

かつてサン・コームの住人であった 90 歳代と 80 歳代の女性が、この町から 30 キロほど離れたジョリエット (Joliette) の高齢者ホームに入居していた。「ケベック社会はとても変わってしまった」——彼女たちは感慨深く、カトリックをめぐる変化や若者のモラルへの違和感に言及した。しかし、移民の増加に対する懸念は聞かれなかった。90 代の女性は「移民の中には良い人もそうでない人もいるが、それはフランス系カナダ人も同じ」と述べ、ムスリムのスカーフについては、「自由意志なら良いが、強制されているのなら問題」と答えた。他方で、80 代の女性の方は、移民もスカーフについても、まわりにはないので特に考えたことはないという。この高齢者ホームのスタッフにも入居者にも移民はいないということであった。

上記は、人びとの生の声をつないで素描したスケッチに過ぎないかもしれないが、日々の生活や体験に根ざす率直な語りのなかに、*interculturalisme* の課題や論点を照らし出す光源がいくつも見え隠れしているように思う。それらを、今後の研究の手がかりとして活かしていきたい。

なお、聞き取り調査は、モンレアル在住の金谷武洋氏、ジャクリヌ・ベ

ダール氏に多くを負っている。記して謝意を表したい。また、本報告は科学研究費助成事業（基金研究C）の成果の一部である。

（いいざさ さよこ 青山学院大学教授）

注

- 1 以下、人口については *Statistic Canada, 2011* を参考とした。
- 2 「ケベック価値憲章」をめぐる経緯と論争については、飯笹、2014 を参照。
- 3 ケベック州における移民の定着に関する分析については、*Soulami, 2015* を参照。
- 4 2007 年、エルヴィル（モンリアルから北西約 160 キロ、人口約 1300 名の町）の町議会が住民の「生活規範」を発表し、民族的マイノリティの移民に対して、かれらの宗教的慣習を受け入れないこと、伝統的なケベックのライフスタイルの「規範」を遵守すべきことを宣言したために論争を巻き起こした。

参考文献

- 飯笹佐代子 (2014) 「『ケベック価値憲章』をめぐる論争」『ケベック研究』第 6 号、30-50 頁。
- Soulami, Mohamed (2015) *Analyse du taux de rétention des personnes immigrantes dans les régions administratives du Québec*, Actions interculturelles de développement et d'éducation.
- Statistic Canada (2011) *Analytical Document: Immigration and Ethnocultural Diversity in Canada* (National Household Survey, 2011).